

月例経済報告

(令和6年10月)

—景気は、一部に足踏みが残るものの、緩やかに回復している。—

先行きについては、雇用・所得環境が改善する下で、各種政策の効果もあって、緩やかな回復が続くことが期待される。ただし、欧米における高い金利水準の継続や中国における不動産市場の停滞の継続に伴う影響など、海外景気の下振れが我が国の景気を下押しするリスクとなっている。また、物価上昇、中東地域をめぐる情勢、金融資本市場の変動等の影響に十分注意する必要がある。

令和6年10月29日

内閣府

[参考]先月からの主要変更点

	9月月例	10月月例
基調判断	景気は、一部に足踏みが残るものの、緩やかに回復している。 先行きについては、雇用・所得環境が改善する下で、各種政策の効果もあって、緩やかな回復が続くことが期待される。ただし、欧米における高い金利水準の継続や中国における不動産市場の停滞の継続に伴う影響など、海外景気の下振れが我が国の景気を下押しするリスクとなっている。また、物価上昇、中東地域をめぐる情勢、金融資本市場の変動等の影響に十分注意する必要がある。	景気は、一部に足踏みが残るものの、緩やかに回復している。 先行きについては、雇用・所得環境が改善する下で、各種政策の効果もあって、緩やかな回復が続くことが期待される。ただし、欧米における高い金利水準の継続や中国における不動産市場の停滞の継続に伴う影響など、海外景気の下振れが我が国の景気を下押しするリスクとなっている。また、物価上昇、中東地域をめぐる情勢、金融資本市場の変動等の影響に十分注意する必要がある。
政策態度	「経済財政運営と改革の基本方針2024～賃上げと投資がけん引する成長型経済の実現～」等に基づき、物価上昇を上回る賃金上昇の実現や官民連携投資による社会課題解決と生産性向上に取り組む。 「デフレ完全脱却のための総合経済対策」及びその裏付けとなる令和5年度補正予算並びに令和6年度予算を迅速かつ着実に執行する。また、足元の物価動向の中、年金生活世帯や中小企業にとっては厳しい状況が続いており、まずは、早急に着手可能で即効性のある対策を講じるなど、二段構えでの対応を行っていく。 「被災者の生活と生業（なりわい）支援のためのパッケージ」に基づき、令和6年能登半島地震の被災者の生活、生業の再建をはじめ、被災地の復旧・復興に至るまで、予備費を活用し切れ目なく対応する。 日本銀行には、経済・物価・金融情勢に応じて適切な金融政策運営を行うことにより、賃金と物価の好循環を確認しつつ、2%の物価安定目標を持続的・安定的に実現することを期待する。 政府と日本銀行は、引き続き緊密に連携し、経済・物価動向に応じて機動的な政策運営を行っていく。 こうした取組により、デフレからの完全脱却、成長型の新たな経済ステージへの移行を実現していく。	経済財政運営に当たっては、デフレ脱却を確かなものとするため、「経済あつての財政」との考え方に立ち、「賃上げと投資が牽引する成長型経済」を実現していく。 足元で物価高に苦しむ方々への支援など「物価高の克服」、新たな地方創生施策の展開、中堅・中小企業の賃上げ環境整備、成長力に資する国内投資促進など「日本経済・地方経済の成長」、災害対応を含む「国民の安心・安全の確保」を柱とした「総合経済対策」を早急に策定する。 「被災者の生活と生業（なりわい）支援のためのパッケージ」に基づき、令和6年能登半島地震の被災者の生活、生業の再建をはじめ、被災地の復旧・復興に至るまで、予備費を活用した対応に加え、経済対策によって万全を期す。 政府と日本銀行は、引き続き緊密に連携し、経済・物価動向に応じて機動的な政策運営を行っていく。 日本銀行には、経済・物価・金融情勢に応じて適切な金融政策運営を行うことにより、賃金と物価の好循環を確認しつつ、2%の物価安定目標を持続的・安定的に実現することを期待する。

	9月月例	10月月例
個人消費	一部に足踏みが残るものの、このところ持ち直しの動きがみられる	一部に足踏みが残るものの、このところ持ち直しの動きがみられる
設備投資	持ち直しの動きがみられる	持ち直しの動きがみられる
住宅建設	おおむね横ばいとなっている	おおむね横ばいとなっている
公共投資	堅調に推移している	堅調に推移している
輸出	おおむね横ばいとなっている	おおむね横ばいとなっている
輸入	おおむね横ばいとなっている	おおむね横ばいとなっている
貿易・サービス収支	赤字となっている	赤字となっている
生産	持ち直しの動きがみられる	このところ横ばいとなっている
企業収益	総じてみれば改善している	総じてみれば改善している
業況判断	改善している	改善している
倒産件数	このところ増勢が鈍化している	このところ増勢が鈍化している
雇用情勢	改善の動きがみられる	改善の動きがみられる
国内企業物価	このところ上昇テンポが鈍化している	このところ上昇テンポが鈍化している
消費者物価	緩やかに上昇している	緩やかに上昇している

(注) 下線部は先月から変更した部分。

月例経済報告

令和6年10月

総論

(我が国経済の基調判断)

景気は、一部に足踏みが残るものの、緩やかに回復している。

- ・個人消費は、一部に足踏みが残るものの、このところ持ち直しの動きがみられる。
- ・設備投資は、持ち直しの動きがみられる。
- ・輸出は、おおむね横ばいとなっている。
- ・生産は、このところ横ばいとなっている。
- ・企業収益は、総じてみれば改善している。企業の業況判断は、改善している。
- ・雇用情勢は、改善の動きがみられる。
- ・消費者物価は、緩やかに上昇している。

先行きについては、雇用・所得環境が改善する下で、各種政策の効果もあって、緩やかな回復が続くことが期待される。ただし、欧米における高い金利水準の継続や中国における不動産市場の停滞の継続に伴う影響など、海外景気の下振れが我が国の景気を下押しするリスクとなっている。また、物価上昇、中東地域をめぐる情勢、金融資本市場の変動等の影響に十分注意する必要がある。

(政策の基本的態度)

経済財政運営に当たっては、デフレ脱却を確かなものとするため、「経済あつての財政」との考え方に立ち、「賃上げと投資が牽引する成長型経済」を実現していく。

足元で物価高に苦しむ方々への支援など「物価高の克服」、新たな地方創生施策の展開、中堅・中小企業の賃上げ環境整備、成長力に資する国内投資促進など「日本経済・地方経済の成長」、災害対応を含む「国民の安心・安全の確保」を柱とした「総合経済対策」を早急に策定する。

「被災者の生活と生業(なりわい)支援のためのパッケージ」に基づき、令和6年能登半島地震の被災者の生活、生業の再建をはじめ、被災地の復旧・復興に至るまで、予備費を活用した対応に加え、経済対策によって万全を期す。

政府と日本銀行は、引き続き緊密に連携し、経済・物価動向に応じて機動的な政策運営を行っていく。

日本銀行には、経済・物価・金融情勢に応じて適切な金融政策運営を行うことにより、賃金と物価の好循環を確認しつつ、2%の物価安定目標を持続的・安定的に実現することを期待する。

1. 消費・投資等の需要動向

個人消費は、一部に足踏みが残るものの、このところ持ち直しの動きがみられる。

「四半期別GDP速報」(2024年4-6月期2次速報)では、民間最終消費支出の実質値は前期比0.9%増となった。また、「消費動向指数(CTI)」(8月)では、総消費動向指数(CTIマクロ)の実質値は前月比0.0%減となった。

個別の指標について、需要側の統計をみると、「消費動向指数(CTI)」(8月)では、世帯消費動向指数(CTIミクロ、総世帯)の実質値は前月比0.1%増となった。供給側の統計をみると、「商業動態統計」(8月)では、小売業販売額は前月比1.0%増となった。

消費動向の背景をみると、実質総雇用者所得は、持ち直しの動きがみられる。また、消費者マインドは、改善に足踏みがみられる。

さらに、足下の状況について、ヒアリング結果等を踏まえると、新車販売台数は、持ち直している。家電販売は、このところ持ち直しの動きに足踏みがみられる。旅行は、おおむね横ばいとなっている。外食は、緩やかに増加している。

こうしたことを踏まえると、個人消費は、一部に足踏みが残るものの、このところ持ち直しの動きがみられる。

先行きについては、雇用・所得環境が改善する下で、持ち直していくことが期待される。ただし、消費者マインドの動向に留意する必要がある。

設備投資は、持ち直しの動きがみられる。

設備投資は、持ち直しの動きがみられる。需要側統計である「法人企業統計季報」(4-6月期調査、含むソフトウェア)でみると、2024年4-6月期は前期比1.2%増となった。業種別にみると、製造業は同3.2%減、非製造業は同3.5%増となった。

機械設備投資の供給側統計である資本財総供給(除く輸送機械)は、このところ横ばいとなっている。ソフトウェア投資は、増加している。

「日銀短観」(9月調査)によると、全産業の2024年度設備投資計画は、増加が見込まれている。「日銀短観」による企業の設備判断DIは、9月調査で、製造業では+3と、6月調査(+2)から過剰超幅が拡大、非製造業を含む全産業では-1と、6月調査(-1)から不足超幅が横ばいとなっている。先行指標をみると、機械受注は、持ち直しの動きに足踏みがみられる。建築工事費予定額は、

このところ緩やかな増加傾向にある。

先行きについては、堅調な企業収益等を背景に、持ち直し傾向が続くことが期待される。

住宅建設は、おおむね横ばいとなっている。

住宅建設は、おおむね横ばいとなっている。持家の着工は、このところ底堅い動きとなっている。貸家の着工は、横ばいとなっている。分譲住宅の着工は、弱含んでいる。総戸数は、8月は前月比0.5%増の年率77.7万戸となった。なお、首都圏のマンション総販売戸数は、弱含んでいる。

先行きについては、当面、横ばいで推移していくと見込まれる。

公共投資は、堅調に推移している。

公共投資は、堅調に推移している。8月の公共工事出来高は前月比1.1%減、9月の公共工事請負金額は同6.4%増、8月の公共工事受注額は同12.3%減となった。

公共投資の関連予算をみると、公共事業関係費は、国の令和5年度一般会計予算では、補正予算において約2.2兆円の予算措置を講じており、補正後は前年度比2.5%増となっている。また、令和6年度一般会計予算の公共事業関係費は、前年度当初予算比0.0%増となっている。さらに、令和6年度地方財政計画では、投資的経費のうち地方単独事業費について、前年度比0.8%増となっている。

先行きについては、補正予算の効果もあって、堅調に推移していくことが見込まれる。

輸出は、おおむね横ばいとなっている。輸入は、おおむね横ばいとなっている。貿易・サービス収支は、赤字となっている。

輸出は、おおむね横ばいとなっている。地域別にみると、アジア、アメリカ及びその他地域向けの輸出は、おおむね横ばいとなっている。EU向けの輸出は、このところ持ち直しの動きがみられる。先行きについては、海外経済の持ち直しが続く中で、持ち直していくことが期待される。ただし、海外景気の下振れリスクに留意する必要がある。

輸入は、おおむね横ばいとなっている。地域別にみると、アジア、アメリカ及びEUからの輸入は、おおむね横ばいとなっている。先行きについては、持ち直しに向かうことが期待される。

貿易・サービス収支は、赤字となっている。

8月の貿易収支は、輸入金額の減少が輸出金額の減少を上回ったことから、赤字幅が縮小した。また、サービス収支は、赤字となっている。

2. 企業活動と雇用情勢

生産は、このところ横ばいとなっている。

鉱工業生産は、このところ横ばいとなっている。鉱工業生産指数は、8月は前月比3.3%減となった。鉱工業在庫指数は、8月は前月比0.8%減となった。また、製造工業生産予測調査によると9月は同2.0%増、10月は同6.1%増となることが見込まれている。

業種別にみると、輸送機械は横ばいとなっている。生産用機械はこのところ横ばいとなっている。電子部品・デバイスは持ち直している。

生産の先行きについては、持ち直していくことが期待される。ただし、海外景気の下振れ等による影響に注意する必要がある。

また、第3次産業活動は、持ち直している。

企業収益は、総じてみれば改善している。企業の業況判断は、改善している。倒産件数は、このところ増勢が鈍化している。

企業収益は、総じてみれば改善している。「法人企業統計季報」（4-6月期調査）によると、2024年4-6月期の経常利益は、前年比13.2%増、前期比6.6%増となった。業種別にみると、製造業が前年比13.0%増、非製造業が同13.3%増となった。規模別にみると、大・中堅企業が前年比14.6%増、中小企業が同6.3%増となった。「日銀短観」（9月調査）によると、2024年度の売上高は、上期は前年比2.6%増、下期は同2.1%増が見込まれている。経常利益は、上期は前年比7.4%減、下期は同3.9%減が見込まれている。

企業の業況判断は、改善している。「日銀短観」（9月調査）によると、「最近」の業況は、「全規模全産業」で上昇した。12月時点の業況を示す「先行き」は、「最近」に比べやや慎重な見方となっている。また、「景気ウォッチャー調査」（9月調査）の企業動向関連DIによると、現状判断は上昇、先行判断は低下した。

倒産件数は、このところ増勢が鈍化している。8月は723件の後、9月は807件となった。負債総額は、8月は1,013億円の後、9月は1,327億円となった。

雇用情勢は、改善の動きがみられる。

雇用情勢は、改善の動きがみられる。人手不足感が高い水準となっている。

完全失業率は、8月は前月から0.2%ポイント低下し、2.5%となった。労働力人口及び就業者数は増加した。完全失業者数は減少した。就業率は、このところ改善の動きがみられる。

「職業安定業務統計」をみると、公共職業安定所における新規求人数及び有効求人倍率は、横ばい圏内となっている。

また、民間職業紹介における求人は、緩やかな増加傾向にある。賃金をみると、定期給与及び現金給与総額は、増加している。実質総雇用者所得は、持ち直しの動きがみられる。また、製造業の残業時間は減少した。

「日銀短観」（9月調査）によると、企業の人手不足感を示す雇用人員判断DIは、全産業では9月調査で-36と、6月調査（-35）から1ポイント不足超幅が拡大している。また、製造業では9月調査で-22と、6月調査（-21）から1ポイント不足超幅が拡大、非製造業では9月調査で-45と、6月調査（-45）から横ばいとなっている。

先行きについては、改善していくことが期待される。

3. 物価と金融情勢

国内企業物価は、このところ上昇テンポが鈍化している。消費者物価は、緩やかに上昇している。

国内企業物価は、このところ上昇テンポが鈍化している。9月の国内企業物価は、前月比0.0%となり、夏季電力料金調整後では、前月比0.1%上昇した。輸入物価（円ベース）は、このところ下落している。

企業向けサービス価格の基調を「国際運輸を除くベース」で見ると、緩やかに上昇している。

消費者物価の基調を「生鮮食品及びエネルギーを除く総合」で見ると、緩やかに上昇している。9月は、前月比では連鎖基準で0.1%上昇し、固定基準で0.2%上昇した。前年比では連鎖基準で1.9%上昇し、固定基準で2.1%上昇した。

「生鮮食品を除く総合」（いわゆる「コア」）は、緩やかに上昇している。9月は、前月比では連鎖基準で0.4%下落し、固定基準で0.3%下落した。

物価の上昇を予想する世帯の割合を「消費動向調査」（二人以上の世帯）で見ると、9月は、1年後の予想物価上昇率別に、2%未満が12.8%（前月14.5%）、2%以上から5%未満が33.7%（前月34.9%）、5%以上が46.6%（前月42.7%）となった。

先行きについては、消費者物価（生鮮食品及びエネルギーを除く総合）は、当面、上昇していくことが見込まれる。

株価（日経平均株価）は、37,100円台から37,900円台まで上昇した。対米ドル円レート（インターバンク直物中心相場）は、143円台から152円台まで円安方向に推移した。

株価（日経平均株価）は、37,100円台から37,900円台まで上昇した。

対米ドル円レート（インターバンク直物中心相場）は、143円台

から 152 円台まで円安方向に推移した。

短期金利についてみると、無担保コールレート（オーバーナイト物）は、0.22%台で推移した。ユーロ円金利（3 か月物）は、0.2%台で推移した。長期金利（10 年物国債利回り）は、0.8%台から 0.9%台で推移した。

企業金融については、企業の資金繰り状況におおむね変化はみられない。社債と国債との流通利回りスプレッドは、総じて横ばいとなっている。金融機関の貸出平残（全国銀行）は、前年比 3.1%（9 月）増加した。

マネタリーベースは、前年比 0.1%（9 月）減少した。M2 は、前年比 1.3%（9 月）増加した。

（※ 9/19～10/25 の動き）

4. 海外経済

世界の景気は、一部の地域において足踏みがみられるものの、持ち直している。

先行きについては、持ち直しが続くことが期待される。ただし、欧米における高い金利水準の継続や中国における不動産市場の停滞の継続に伴う影響による下振れリスクに留意する必要がある。また、中東地域をめぐる情勢、金融資本市場の変動の影響を注視する必要がある。

アメリカでは、景気は拡大している。

先行きについては、拡大が続くことが期待される。ただし、高い金利水準の継続に伴う影響による下振れリスクに留意する必要がある。

2024年4－6月期のGDP成長率（第3次推計値）は、個人消費や設備投資が増加し、前期比で0.7%増（年率3.0%増）となった。

足下をみると、消費は増加している。設備投資は緩やかに増加している。住宅着工は弱い動きがみられる。

生産はおおむね横ばいとなっている。非製造業景況感はこのところ上昇している。雇用面では、雇用者数は緩やかに増加しており、失業率はおおむね横ばいとなっている。物価面では、コア物価上昇率はおおむね横ばいとなっている。貿易面では、財輸出は緩やかに増加している。

9月17日～18日に開催された連邦公開市場委員会（FOMC）では、政策金利の誘導目標水準を0.50%ポイント引き下げ、4.75%から5.00%の範囲とすることが決定された。

アジア地域については、中国では、政策効果により供給の増加がみられるものの、景気は足踏み状態となっている。

先行きについては、各種政策効果が次第に発現し、徐々に足踏み状態を

脱することが期待される。ただし、不動産市場の停滞の継続や物価下落の継続による影響等に留意する必要がある。

韓国では、景気は持ち直している。台湾では、景気は緩やかに回復している。インドネシアでは、景気は緩やかに回復している。タイでは、景気は持ち直しに足踏みがみられる。インドでは、景気は拡大している。

中国では、政策効果により供給の増加がみられるものの、景気は足踏み状態となっている。2024年7－9月期のGDP成長率は、前年同期比で4.6%増となった。消費はおおむね横ばいとなっている。固定資産投資は伸びがおおむね横ばいとなっている。財輸出は持ち直している。生産は持ち直している。消費者物価はおおむね横ばいとなっている。

韓国では、景気は持ち直している。2024年7－9月期のGDP成長率は、前期比で0.1%増（年率0.5%増）となった。台湾では、景気は緩やかに回復している。2024年4－6月期のGDP成長率は、前年同期比で5.1%増となった。

インドネシアでは、景気は緩やかに回復している。2024年4－6月期のGDP成長率は、前年同期比で5.0%増となった。タイでは、景気は持ち直しに足踏みがみられる。2024年4－6月期のGDP成長率は、前年同期比で2.3%増となった。

インドでは、景気は拡大している。2024年4－6月期のGDP成長率は、前年同期比で6.7%増となった。

ヨーロッパ地域については、ユーロ圏では、景気は一部に足踏みがみられるものの、持ち直しの動きがみられる。ドイツにおいては、景気は足踏み状態にある。

先行きについては、次第に持ち直しに向かうことが期待される。ただし、高い金利水準の継続やエネルギー情勢に伴う影響による下振れリスクに留意する必要がある。

英国では、景気は持ち直している。

先行きについては、持ち直しが続くことが期待される。ただし、高い金利水準の継続に伴う影響による下振れリスクに留意する必要がある。また、中東地域をめぐる情勢を注視する必要がある。

ユーロ圏では、景気は一部に足踏みがみられるものの、持ち直しの動きがみられる。2024年4－6月期のGDP成長率は、前期比で0.2%増（年率0.8%増）となった。消費はおおむね横ばいとなっている。設備投資は弱含んでいる。生産は下げ止まりつつある。サービス業景況感は持ち直しの動きがみられる。財輸出は弱含んでいる。失業率は横ばいとなっている。コア物価上昇率はおおむね横ばいとなっている。

ドイツにおいては、景気は足踏み状態にある。2024年4－6月期のGDP成長率は、前期比で0.1%減（年率0.3%減）となった。

英国では、景気は持ち直している。2024年4－6月期のGDP成

長率は、前期比で0.5%増（年率1.8%増）となった。消費は持ち直している。設備投資はおおむね横ばいとなっている。生産はおおむね横ばいとなっている。サービス業景況感は持ち直している。財輸出はこのところ持ち直している。サービス輸出は緩やかに増加している。雇用者数はおおむね横ばいとなっており、失業率はおおむね横ばいとなっている。コア物価上昇率はおおむね横ばいとなっている。

欧州中央銀行は、10月17日の理事会で、政策金利（預金ファシリティ金利）を3.25%に引き下げることを選定した。イングランド銀行は、9月18日の金融政策委員会で、政策金利を5.00%に据え置くことを選定した。

国際金融情勢等

金融情勢をみると、世界の主要な株価は、アメリカ、英国ではおおむね横ばい、ドイツではやや上昇、中国では大幅に上昇した。短期金利についてみると、ドル金利（3か月物）は低下した。主要国の長期金利は、アメリカ、英国では大幅に上昇、ドイツではやや上昇した。ドルは、ユーロに対して増価、ポンドに対してやや増価、円に対して大幅に増価した。原油価格（WTI）はやや下落した。金価格は上昇した。